

平成 29 年度講演会

「小児がん既往の患者さんが来院したら ー口腔内症状と対応法ー」

日本歯科大学生命歯学部

准教授 河上 智美先生

小児がんは、近年では治療法の改良や薬剤の開発によって治癒率は上昇し長期生存が可能となっています。がんの治療法には、外科療法、放射線療法、免疫療法、移植療法があり、これらが組み合わされて行われます。しかし、小児の成長期に行われるこれらの治療法は子供の心身に様々な影響をおよぼし、口腔内にも障害が現れることがわかってきました。

医科においては、治療後の患者の健康維持や管理の重要性が唱えられて、定期的なフォローアップを行う体制がスタートしました。また歯科でも、既往を有する患者の来院機会が増えると考えられ、口腔疾患に対する対応が期待されています。

今回は、かかりつけ歯科医におけるの定期管理をふまえて、小児がんの発症時の症状から、がんの治療時期の歯科での対応法、がんの治療後に現れる歯科的特徴や口腔審査のポイントについて解説します。

略歴

1991年日本歯科大学歯学部卒業

1995年日本歯科大学大学院歯学研究科修了

2014年日本歯科大学生命歯学部准教授

「女歯力アップの保険請求」

庄内こどもの歯科
庄内 喜久子先生



うっかり間違いの多い請求を改善するだけでやりがいが！
今までこんなこと聞けないわと思っていたことが結構みんなが分かっていないなど聞いてみるとすっきりすることがあるかもしれません。

ストレス解消で女歯力アップのお手伝いができるかと…

略歴

昭和 60 年日本歯科大学卒
北海道社会保険支払基金審査会審査委員
日本小児歯科学会評議員
日本小児歯科学会認定専門医指導医
日本障害者歯科学会代議員
日本障害者歯科学会認定医

趣味：ゴルフ、テニス、食べ歩き、
マルチーズと暮らしている

「小児歯科医が知っておきたい 母子保健の最新情報」

昭和大学歯学部小児成育歯科学講座
客員教授 井上 美津子先生



少子化が進行し、少子高齢社会となった日本の現状の中で、母子保健の状況も大きく変化してきました。女性の結婚・出産の高年齢化が進み、2015年には第1子出生時の母の平均年齢が30歳を超え、少子化や低体重児出産の一因ともなっています。一方、小児医療水準の向上により、感染症による乳児死亡率は著しく減少してきています。

歯科領域でも、小児期のう蝕の減少はこの30～40年で顕著であり、重症う蝕も減少しています。しかし、小児期のう蝕有病状況には地域差も大きく、3歳児のう蝕有病率には20～30ポイントの差がみられます。残る重症う蝕の背景には、親の考え方や経済状況を含めた生活環境、子どもの発達障害などがみられることも多く、時には虐待（ネグレクト）が疑われることもあり、多職種が連携した対応が必要となります。

また、2015年から始まった「健やか親子21（第2次）」の課題や歯科関連の指標、テーマグループごとの活動状況や、2016年から始まった「第3次食育推進基本計画」の中での歯科からの目標などについても概説させていただきます。

さらに、母乳育児の推進と「母乳とう蝕の考え方」についても、最近の流れについて情報提供させていただこうと考えています。

略歴

- 1974年 東京医科歯科大学歯学部卒業 東京医科歯科大学歯学部小児歯科学教室入局
- 1977年 昭和大学歯学部小児歯科学教室 助手
- 1983年 昭和大学歯学部小児歯科学教室 専任講師
- 1994年 昭和大学歯学部小児歯科学教室 助教授
- 2006年 昭和大学歯学部小児成育歯科学講座 教授
- 2015年 昭和大学歯学部小児成育歯科学講座 客員教授
- 2015年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 非常勤講師